

1

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(配点六〇%)

人間の自由意志について論じられる際にしばしばいきあいに出来るのが、「ビュリダンのロバ」の話である。すなわち、ロバが量と質の全く等しい二つの枯草の束の真中におかれると、双方からの刺激が全く等しいために、ロバはどちらの枯草を食べるか選択することができずに餓死するであろう、というのである。ビュリダンは一四世紀前半におけるパリのオツカム学派の主導者で、自由意志の問題に対しては決定論の立場をとった。このロバの話は彼の著作の中には見いだされないが、彼が決定論を主張したときにひかれた例とされている。

この話においてロバが枯草を前にして餓死しなければならないのは、要するに選択の理由がないためである。すなわち、二つの枯草の束からの刺激が完全に等しければ、結局はロバにとって両者の条件が完全に等しいわけであるからどちらかを選択すべきその理由も必然性もなく、かくしてロバはどちらも選択することができないことになる、というわけである。このような推論と結論を真にうける人は、まずいであろう。ロバはどちらかの枯草を食べるはずである。そして残りの枯草も食べるかもしれない。ただし、実際に実験を行ってその結果がデータとして得られても、問題が解明されたことにはならない。^①この理論がいかなる点で誤っているかが解明されねばならないのである。

「ビュリダンのロバ」の話が奇妙な結論に陥るのは、行為の構造が、その事象に即して適切に解明されていないがためである。話を「ロバ」から「人間」に置きかえてみよう。たとえばある人が椅子に座っていて、彼の前にある机には彼から等^(ア)キヨリの所に、同じ量の水の入った二個の全く同じグラスが置かれているとしよう。その人は喉がかわいているとするならば、どちらかのグラスを取って水を飲むはずである。あるいは両方の水を飲むかもしれない。ところが「ビュリダンのロバ」の話に従うなら、この喉のかわいている人は、目の前に水があるにもかかわらずそれを飲むことができないことになるのである。つまりこの人は、喉がかわいていて水を飲みたいのだが、両方のグラスからの刺激が全く等しいためにどちらのグラスの水を飲むべきかその理由を見いだせず、かくしてどちらのグラスも選択することができないことになるのである。しかし、ここで選択という表現が用いられているが、実は行為の構造の内実に即して四種類の選択が区別されねばならないのであり、そしてこのような状況における選択はそれらのいずれであるかが確認されねばならないのである。また、行為がその諸契機^(ア)の多様な可能性の中のいずれかにおいて遂行されているからといって、必ずしもそこで選択がなされているとは限らないのであり、この点もあわせて考察されねばならない。そしてさらに、選択や行為における任意の種類とそれぞれの内実が、行為の構造に即して分析されねばならないのである。

選択という表現が用いられる典型的な場合は、人が決意をする時である。人が決意をするのは、人が迷いに陥る時である。ところで人は、ひとつひとつの行為について、何をどうなすかまず迷ってから決意し、選択しているわけではない。人間の連続の行為は、そこにはいくつかの迷いと決意が見

られるにせよ、決して決意の集合から成り立っているわけではない。迷いはむしろ本人の意に反して不意にあらわれて行為を中断させる否定的な現象であって、人間の行為はさしあたりは、調和的に、スムーズに展開しているものである。というのも、何を、どのように、いかなる手順でなすべきかは、さしあたっては行為の流れの中でおのずと決まってくるのであって、その限りそこには迷いの生じるヨチはないからである。人間の行為のこの基本的な展開の可能性の根拠は、人間の行為の根本構造に求められねばならない。

人間の行為の根本構造は二つの要因から成り立っている。その一つは目的である。つまり、人間の行為は基本的に合目的である。行為は本来、何らかの目的のためにもくろまれ、遂行されているものである。この合目的行為の中には、さしあたり時間をつぶすための行為といった消極的な目的のための行為も含まれる。この場合の行為は、一連の合目的行為が一次的に途切れるその欠落を補うための行為である。また、行為を身体的活動と同一視してはならない。何らかの目的のために、何もせずにじっと立っている、あるいは座っている場合も、そこでは立っている行為や座っている行為が遂行されているのである。また本人の一連の目的に反するような非合理的行為であるとか、気まぐれや出来心や好奇心による行為もやはり、特殊な型の合目的行為である。ただしこのような場合の目的と行為は、一連の合目的性にそぐわないヨウソウでそこからすつかり浮き上がってしまったいて、しばしば本人はそこにおいて働いている目的に対してほとんど無自覚である。またさらに、他人に強制されてなざるを得ないような本人にとつて不本意な行為も、不本意ながらも自分の生命であるとか誰かの生命や財産等々のためになざるを得ない以上は、やはり一種の合目的な行為である。

このように人間の行為は基本的に合目的である。ところで人間の行為の根本構造を成しているもう一つの要因は、規範である。すなわち人間の行為は基本的に、道徳や法律、諸々の規則や掟^{おきて}によつて、また宗教、伝統、習俗等々における様々な規範によつて秩序づけられ、方向づけられているのである。人間は存在論的に社会的存在であり、何らかの規範の枠^{かど}において、人間は人間たりえている。たとえある人が山の中なり孤島なりにおいて人間社会から孤立した生活を営んでいようと、彼は存存的には非社会的存在であるが、存在論的には、社会的存在なのである。^③ また仮に社会的規範を全く無視した生き方をしている人間がいたとしても、彼の生き方と行為は社会的規範的存在を根本条件とする人間存在の否定的欠如的な現象にすぎない。そのような人間達が集まって契約として規範を定めることによつて社会が成立したわけではないのである。人間と人間の闘い^{たたか}、規範と規範の闘い、人々の間で結ばれる規範の契約、こういった現象は、存在論的に社会的存在である人間達の間で生じる存在的な出来事である。ただし、それでは個々の人間が先なのかそれとも社会が先なのかといった疑問が生じるかもしれないが、そのような問いは、どちらか一方がまず発生して次に他方が発生するといった図式の上に立つ問いである限りは、根本的に誤った問いにすぎない。

このように人間の行為の根本構造は、目的と規範とから成り立っている。これらの要因は個々の人間の行為や人々の行為を秩序づけ、脈絡づけ、意

味づけ、価値づけている統制的原理である。あるいはこの両者は、人間である限りの人間の人格としての整合性を支えているその根拠ですらあるもので、人間存在の統制的原理と呼ぶこともできよう。ただし、目的と規範とはそれぞれが全く無関係な要因として機能しているわけではない。両者は密接に連関していて、しかもある場合には、あるいは見方によっては、目的も規範として機能し、規範も目的として機能しているものである。さらに、この統制的原理において、常にすでに様々な習慣が形成されている。諸々の目的と規範が、しかもそれぞれがお互いに連関して円滑に機能しうるのは、その多くは習慣の力によるものである。また人間の行為に、その人の身体的特徴と能力や心的特徴と傾向性が関与しているのも当然である。しかしこれらの要因も、行為との動的連関において問題となる要因とされる限りに関して、統制的原理との脈絡でとらえられるべきである。

ところでこのようなものとしての行為は、経験の一部である。というのも、行為はすべての人間の存在であり経験であるが、経験がすべて行為であるとは限らないからである。たとえば「寝る」という身体活動は行為としての経験であるが、「寝ている」という身体の状態は経験ではあっても行為ではない。また誰かにナグ^(注)られて「倒れる」という身体活動は、経験ではあるが行為ではない。しかし確かにこのように行為は経験の一部ではあるが、行為の統制的原理こそが人間存在の根本条件であるがゆえに、むしろ行為にあらざる経験が行為の展開の中に組み入れられるという仕方^(注)で経験全体がとらえられるべきである。一連の経験は、行為としての経験と行為にあらざる経験との単なる組み合わせから成り立っているわけではない。しかるべき目的のために行為が遂行されるその過程において、行為にあらざる経験が、ある場合は本人の意図に即して、またある場合には本人にとって不本意な仕方^(注)で、サンヨ^(注)するのである。また、あくび、まばたき、くしゃみ等といった生理的身体活動も行為にあらざる経験であるが、これらも特殊な型の経験として、経験全体の中に組み入れられるべきであろう。

(注) ○ピュリダン——フランスの哲学者。

(大滝朝春『存在と認識』による)

問一 傍線部ア)ウ)のカタカナの部分^かを漢字に改めなさい。(解答は楷書^{かいしょ}ではつきり書くこと。)

問二 傍線部①「この理論がいかなる点で誤っているかが解き明かされねばならない」とあるが、筆者は、どのように解き明かそうとしているのか。
一八〇字以内で説明しなさい。(句読点なども一字と数える。)

問三 傍線部②「二つの要因」を言い換えた表現を、本文中から七字以上一三字以内でそのまま抜き出しなさい。

問四 傍線部③「彼は存在的には非社会的存在であるが、存在論的には、社会的存在なのである」とは、どういうことか。わかりやすく説明しなさい。

問五 筆者は、「人間の行為の根本構造」について具体例を挙げながら言及している。これを踏まえた上で、あなたの意見や考えを三〇〇字以内で述べなさい。(句読点なども一字と数える。)

2

次の文章は、『うつほ物語』の一節である。大将(藤原仲忠)と宮(女一の宮)との娘いぬ宮(数え年六歳)は、母のもとを離れ、祖母(大将の母)から琴(七絃の琴)の演奏を伝授されることとなった。新たに設けられた楼閣(高い建物)で、父に付き添われながら、いぬ宮は琴の演奏を習う。これを読んで、後の問いに答えなさい。(配点二〇%)

率(ひら)て上(のぼ)りたまひて、琴(ま)取り寄せて奉(た)りたまへば、「雖(むづか)に聞かせむ。いづら」とのたまへば、笑(わ)ひたまひて、「ここに侍(は)り」とて、御前(ごぜん)にさし据(た)ゑたまへり。尚侍(しやうじ)見たてまつりたまふに、おはせしよりも、いとこよなくうつくしげになりまさりたまひけり。気高(けだか)うけうらにおはするさま、ほどよりはいとこよなうおはしけりと、あはれに見たてまつりたまふに、静(しず)かに、稚児(ちびこ)の御(ご)ありさまともなく、おほどかなり。

まづ、かの治部(ちぶ)卿(きやう)の習(な)はしたてまつりたまひし龍角風(りゆうかくふう)をいぬ宮(いぬみや)の、細緒風(ほそおふう)を大将(だいしやう)のにて弾(は)かせたてまつりたまはず。まづ、尚侍(しやうじ)のおとど、二つながら取り寄せて、調(と)べ調(と)へたまふ音(ね)の、限(かぎ)りなくおもしろし。大将(だいしやう)、いぬ宮(いぬみや)に龍角奉(りゆうかくほう)りて、弾(は)き始めさせたてまつりたまふに、御手(ごて)はいと小さきに、弾(は)き鳴(な)らしたまへる音(ね)、さらにもとならず、いとかしこく心得(こころえ)たまひて弾(は)きたまふ。片時(かたとき)に、調(と)べは弾(は)きたまひつ。次に、また、曲(きょく)の物(もの)一つ教(お)へたてまつりたまふに、いと同じく弾(は)き取りたまふに、尚侍(しやうじ)のおとど、「さべきにて、かくおはする」と見たてまつりたまひて、ゆかしくなむとて弾(は)き立てたまひ、掻(か)き合(あ)はせたまへるほどに、涙(なみだ)の落ちつつのたまふ、「昔(むかし)、四つにて習(な)はしたまひしに、心(こころ)には入れながら、ほどもなくて、乳母(うのむと)の膝(ひざ)に居(ゐ)ながら、手(て)どもは弾(は)き取りて、音(ね)をよく弾(は)き伝(つた)へることは、七つよりなむ、「大人の琴(こと)の音(ね)になりぬ」とのたまひし。これは、大人(おとな)だに、琴(こと)の音(ね)をかくうるはしうは弾(は)き立つることは、えせぬものを」と聞(き)こえたまふ。大将(だいしやう)、かくおはするを、「本意(ほんい)はかなひぬべかめり」と、うれしうおぼえたまふこと限(かぎ)りなし。

④「まだ弾(は)きたまふべけれど、苦(くる)しくもぞおはする。今日は、これを」と聞(き)こえたまふ。三度(さんど)と問(と)ひたまはず。年月(としづき)を経て、上手(うま)に弾(は)き置(お)きたりける人の、今(いま)、人の弾(は)くを聞(き)きて、心得(こころえ)るやうなり。年(とし)ごろも、宮(みや)の弾(は)きたまふを、添(そ)ひ居(ゐ)て、弾(は)かまほしうしたまひしものなれば、いささか苦(くる)しくもおぼえたまはず、御心(ごこころ)に入(い)れたまへるさま限りなし。

(注) ○率(ひら)て上(のぼ)りたまひて——父(ちち)大将(だいしやう)がいぬ宮(いぬみや)を連れて楼(ろう)の階上(かいはう)にお昇(のぼ)りになつての意(い)。 ○雖(むづか)——人形(にんぎやう)。 ○御前(ごぜん)——いぬ宮(いぬみや)の前(まへ)をさす。

○かの治部卿(ちぶきやう)——尚侍(しやうじ)の父(ちち)清原俊蔭(しみずはら ともかげ)。かつて尚侍(しやうじ)に琴(ま)を伝授(でんじゆ)した。 ○龍角風(りゆうかくふう)・細緒風(ほそおふう)——琴(ま)の名称(めいせう)。

○尚侍(しやうじ)のおとど——尚侍(しやうじ)に同じ(おな)じ。「おとど」は敬称(けいせう)。 ○調(と)べは弾(は)きたまひつ——ここでの「調(と)べ」は練習曲(れんしゆきょく)の意(い)。

○曲(きょく)の物(もの)——(練習曲(れんしゆきょく)ではない)琴(ま)の樂曲(がく)。

○さべきにて、かくおはする——琴^{きん}を伝授されるはずの人として、(いぬ宮はこうしてお生まれになったのだの意。
○四つにて習はしたまひし——俊蔭が四歳の尚侍に琴の伝授を始めたことをいう。 ○ほどもなくて——まだ幼くて。

〔系図〕 俊蔭—尚侍—大将(仲忠)

——いぬ宮

宮(女一の宮)

問一 傍線部①「うつくしげに」、傍線部②「おほどかなり」を口語訳しなさい。

問二 傍線部③「これは、大人だに、琴の音をかくうるはしうは弾き立つることは、えせぬものを」を、必要な語句を補ってわかりやすく口語訳しなさい。

問三 傍線部④「まだ弾きたまふべけれど、苦しくもおはする。今日は、これを」のように尚侍(あるいは大将)は声をかけるが、いぬ宮自身は琴の練習をどのように感じているか。その理由とともに説明しなさい。

問四 『うつほ物語』よりも成立時期の遅い作品を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 竹取物語

イ 万葉集

ウ 日本霊異記

エ 古事記

オ 更級日記

3

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。設問の都合で返り点と送りがなを省略したところがあります。(配点二〇%)

医扁鵲見秦武王。武王示之病。扁鵲請除。左右曰、「君之病、在耳之前、目之下。除之、未必已也。将使耳不聪、目不明。」君以告扁鵲。扁鵲怒而投其石。曰、「君与知之者謀之、而与不知者败之。使此知、秦国之政也、则君一挙而亡国矣。」

(『戦国策』による)

(注) ○扁鵲——名医の名。 ○武王——戦国時代、秦の君主。

○已——癒える。治癒する。終止形は「いゆ」。 ○石——医療用の石針。

問一 傍線部①を書き下し文にしなさい。

問二 傍線部②を口語訳しなさい。

問三 傍線部③について、扁鵲はなぜ国を亡ぼすことになると言ったのか。その理由をわかりやすく説明しなさい。

問題訂正

記号

K 1

科目

国語

訂正箇所

2

ページ

後ろから7行目の傍線部

(誤)

③

彼は存存的には

.....

(正)

③

彼は在存在的には

.....